

# メイとイースチナの事件簿 惨劇の廃館

ハセアキオ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

遭難者のフェリーンの子供を探すため、メイとイースチナはグループとともに森を搜索する。子供を見つけて二人で追いかけると、森の奥でひっそりと佇む廃館が目の前に現れる。ここに子供がいると思いを探索すると、明らかに様子がおかしい。

人為的に裂かれた絵画、血痕、爪のような床の傷……惨劇の痕が色濃く残る館に怯えながらも、二人は奥へと進んでいく。

館を探索する二人に襲いかかる怪奇現象と謎。アークナイツのホラーとミステリー二次小説

# 目次

森の廃館	1
一階の探索	8
二階の探索、子供との遭遇	15
断たれた帰路	22
変異する館	29
夢の少女の正体	40

## 森の廃館

名前 ミネア 種族 フェリオン

リターニア国境付近にて感染者難民を保護したところ、一人の子供が山の中で遭難したという情報を得た。目撃者の証言によれば近くの山に逃げたのを見たという。ロドスがこの地を離れるまでに、なんとかとも見つけ出さないといけない。

そこでいくつかのチームを組んで捜索を行う。以下には彼女の特徴を――。

「予備探偵のイースチナ！ こっちに来てみるのだ」

書類に落としていた目を、うるさい声の方に向ける。

「なんですか一体」

空っ風が吹く草原から少し先に、手で庇を作っている人がいる。

カーデイガンを腰に巻き、短パンを穿いた足をがに股っぽくして深い森の中を見ていた。頭にはペンギンの人形が乗っていて、ピンクの三つ編みが特徴的なこの少女はメイという。

「こっちに道らしいのがあるのだ」

「ただの獣道じゃないですか？ 地図ではこちらに道はないはずですよ」

「獣道にしては踏み荒らされた形跡はないのだ。探偵の直感が怪しいと言ってるのだ」

自称ヴィクトリア王室探偵。自称多くの事件を解決し、自称上司にその才能を買われ、ロドスに派遣された……らしい。なんともうさなくさい経歴である。

「何が怪しいんです？」

「予備探偵にしては勘が悪いのだ」

「だから私は予備探偵ではありませんよ」

はあつとため息を吐く。またよくわからない役職になっている。

「子供が遭難してどのくらいの間経ったのだ？」

「確か丸一日だったと思います」

「ならばどこか雨風をしのげる場所にいると思うのだ。そこで、あれ」と、小さい指を森の奥に向ける。

「あそこの岩壁に穴があるのだ。近くに川もあるから、もしかしたら雨よけのために入ったかもしれないのだ」

なるほど、一理ある。

「ここらへんは隣獣もいませんし、少しくらいなら離れても大丈夫そうですね」

「行って確認してみるのだ」

ちらりと後ろを見る。チームリーダーたちはこの草原の真反対を搜索しているが、別に離れているわけではない。

「ほら穴を見るだけならいいでしょう」

「よし、念のため銃を構えておくのだ」

各々が装備を構え、森の中を突き進んでいく。

明るい場所から一転、折り重なった影に覆われた暗い場所となる。少し肌寒いくらいの空間で、露出した足に草の痛さを感じながら進んでいく。

木漏れ日を頼りに歩を進めると、岩肌に空いたほら穴が見えてきた。想像以上に縦に長い入口だった。

「おおい！ 誰かいないのだ！」

大声は、暗い闇の中に吸い込まれてこだまする。

しかしそれ以外の音はしない。空つ風やそれに揺れる草木の音、小川のせせらぎしかない。辺りにも人影はおろか動物の気配もなかった。

「誰もいないみたいなのだ」

「まあほら穴があるからといって人がいるとは限りません」

「もちろんわかっているのだ。ところで探し人の服装、身長は何センチくらいなのだ？ もう一度確認したいのだ」

「ええと……」

事前に配られた書類を見る。

「身長は140センチですね。おかつぱ頭で、白いワンピースを着ている」

「紛れもない子供だし、服装も簡素で危ないのだ。一日すら野宿は厳しいと思うのだ」

確かにそうだろう。森深い山の中を生き延びられる装備も体力もないはずだ。

「その通りです。一刻も早く見つけないと」

「ここら辺をもう少し探してみるのだ。川が大事なのは子供でも直感でわかるし、いる可能性はあるのだ」

「気持ちはわかりますが、持ち場を離れるのは危険です。早くみんなのところに戻りましょう」

そうして振り返ると、

「あー！」

メイが唐突に叫び、思わずびくつとする。

「いるのだ！」

「え？」

「探し人があそこにいるのだ！」

大声とともに指した指の先には二つの木がある。その間から体を覗かせているのは小さな女の子だった。おかつぱに、白いワンピースがかすかな木漏れ日で見えている。

見つけた。そう思い手を振ろうとした瞬間、彼女はぱつと木から手を離して奥に走って行った。

「あー！ ま、待つのだ！」

慌てて後を追いかける。

「君を保護しに来たのだ！ 怪しいやつではないのだ！」

「おもちゃの銃をしまってください！ 怖がるでしょう！」

「ッ」丁寧に銃を持った手を振ったら怖がるに決まっているだろう。

「安心してください！ ロドスからミネアさんの保護を依頼されました！」

名前を呼んでも、彼女は振り返らずに奥へと進んでいく。

闇と木漏れ日の光、草と木々が交互に視界を過ぎ去っていく。彼女の姿も消えたりふと現れたりしている。

戻って応援を要請しようと思ったが、ここで見逃したらまた見つけ

られる保証はない。そう思い、小川をジャンプした。

「ああもう！　なんで逃げるのだ！」

「怒らないでくださいよ。きつと怖いのでしよう」

と言いつつ、見え隠れする背中を見る。

……メイには言ったが、怖がっているようには見えない。まるで目的地が定まっているように、こちらを一切見ずに走り去っていく。

それに、私たちの足でどうしてこうも距離を詰められないのか。

やがて光が森の奥から差し込んできた。走る毎に光は近づくが、ちょうど逆光となり彼女は吸い込まれるように消えていった。私たちも数秒遅れて駆けつける。

「……は……」

暗闇から解放されて光に入る。一瞬目をやられ、ゆつくりと開くと目の前に廃墟が現れた。

滅びた大きな館だ。館は三階建てほどあり、リターニアの建物と同じ石造りだ。小さなお城と言われても不思議ではない。窓という窓は全て割れており、枠だけが闇を外に出させまいと踏ん張っているように見えた。

岩壁に背を預け、陽光を一身に浴びて入口をこちらに向けている。いや、入口と言っているのだろうか。扉は外れてわずかに傾き、先ほど見たほら穴のような闇が広がっている。

「いないのだ……」

辺りは背の短い草が生えているくらいで、隠れられる場所はない。向こう側は左右を覆うように岩山があり、また森に入り直したらさすがにわかるはずだ。

「あの建物に入っていたのだ？」

「そうとしか考えられないですね。ですが……」

再度館を見る。遠目から見ると小綺麗な外壁も、近づいてみれば所々剥けている。まるでビスケットを食べた時のように、地面にぼろぼろと壁の欠片が落ちていく。

不気味な外観は、まさしくお化け屋敷と形容できる。

「こんな怖いところに一人で入るとは」

「え、まさか怖いのだ？」

「違いますよ。子供側で考えてです」

別段怖いわけではないが、近づいてみると圧巻の大きさに気圧される気分にはなった。巨人が居座り、真上から見下ろしているような……。

「ん？」

ぱつと二階の角を見る。

視線を感じたのだ。正確に言えば、何かが視界の端に映った。しかし壊れた窓があるばかりで、何かがあるわけではない。窓の中は暗いままだし、鳥が屋根に留まっていたわけでもない。

気のせいかな？

「中に入ってみるのだ」

「暗いですが大丈夫ですかね」

「それなら心配ご無用！」

そう言ってポーチから取り出したのはヘッドライトだった。

「これがあれば暗いところにも入っていけるのだ」

ベルトを頭に取り付ける。さながら鉱山作業員みたいな格好になり、似合わないなと思っただけともう一本を取りだした。

「予備探偵もつけるのだ」

「あ……はい」

耳に注意しながらしゅしゅ付ける。

「よし、さっそく中に入ってみるのだ！」

「あ、待ってください」

言いながら扉だったものに近づく。

「邪魔ですので取り外しましょう」

材質は鉄だが、おそらくは問題はない。ちよつと腰を入れれば容易く持ち上がる。ベニヤ板くらいあるそれを取り外し、えいやと外に投げ捨てる。

「す、すごいのだ。さすがウルサス人」

続けてもう片方も取り外す。こちらは接合部分がまだ生きていたが、ちよつとひねればすぐに外せた。それを運んでいる途中も、絶え



ず森の方に目配せをする。やはり人の影も気配もない。

「終わりましたよ」

作業が終わり入口に戻る。

「……」

彼女は玄関の前に立ち尽くし、中を見ている。そういえば作業中はやけに静かだなと思った。

「どうかしたんですか？」

「……」

明らかに様子がおかしい。中を見つめて石像のように固まっている。一体何があったのだろうか、私も中を見た。

開け放たれた玄関からの光で、目の前がホールなのがわかる。少し奥に階段があり、石造りの床に敷かれた絨毯の道がある。絨毯はなぜか裂かれたようにぱっくりとした切り口があり、もはや道として機能はしていない。

おそらくメイが黙っているのは、白い床部分が原因だ。

至る所に、黒く飛び散った液体の痕があるのだ。

人がいた頃は真っ白だっただろう場所には、絵筆で払ったような擦れた痕、点々と小さな痕、バケツをひっくり返したような目立った痕がある。階段の手すりにも、また赤い絨毯にも等しく黒い液体が広がっているのだ。

「な、なんなのだここは！ まるで殺人現場みたいなのだ」

「そんなわけ……」

ヘッドライトを点け、ひときわ目立った痕を照らす。年期が経っていて血かどうかは判別がつかないが、絵の具や着色料をここまで盛大に飛び散らせているのもおかしい。

観察していくうちに、絨毯と同じく床にもいくつか切り傷があるのを発見した。石の床に切り傷？

「やっぱり変なのだ。美術品も切りつけられているのだ」

メイが照らした壁を見てぎよっとする。おそらく老紳士の自画像と思われる絵画が引き裂かれていた。額縁は右側が欠損しており、中の絵画は鼻から上が大きな傷がある。そこからめくれて下地があら

わになっついていて、まるで目にぼかしても入っているかのようだった。老紳士とわかつたのは、立派な髭とスーツ姿の体が胸部分まで見えていたからだ。その体部分も、まるでわざとかのように入り傷がいくつもある。

「獣でも入ってきたんですかね」

「だ、だけど骨がないのだ。獣に食われたとか、誰かに殺されたとかではないはずなのだ」

「詮索するのは止めに行きましょう。今は遭難者を捜すのが優先です」

と、言いながらも内心は恐怖があつた。血と思しき痕や傷跡もそうだが、何か近寄りが見たい雰囲気を感じてくる。

「おーい！ 誰かいないのだ！」

うるさい声が反響する。声の跳ね返りを聞くと、奥に広いのかもしれないと思つた。だが返事はない。足音なども聞こえてこない。しばらく耳を澄ましてみると、

ボタン！

扉が勢いよく閉まる音が、上階の方から聞こえた。思わず体が硬直した。

「……行きますか？」

「……うーん」

彼女が頭を振ると同時に、ライトがぶんぶんと揺れる。

「こうなったら行くしかないのだ。子供がいるのに帰れないのだ」

「同感です。では覚悟を決めて、行きましょうか」

言いながら、ふと疑問が頭をよぎつた。

果たして今の音は子供が発した音なのか。だいぶ大きな音だつたし、上の階から聞こえた。おそらく、私が先ほど視線を感じた……。

「わ！ 急にライトをふりふりさせないでほしいのだ。びっくりするのだ」

「あ、すみません。つい頭を振ってしまいました」

「予備探偵としてしっかりするのだ」

私らしくもない想像をしてしまった。その不安を振り払い、暗がりのホールをさらに進んだ。

## 一階の探索

ヘッドライトの光しか頼れないホールには、階段前まで玄関からの明かりがある。その縁に立ち、上を仰ぎ見る。

ホールにあつた階段は使い物にならなかった。

二階の壁際には柵がついた通路があり、階段は直にそこつながっているのだが、左右に続く渡り廊下がどちらも途中から崩れてしまっているのだ。そのため別の階段を探すために一階を探索しなければならぬ。

「どこに行きましょうか？」

残骸が散らばる一階ホールを見回す。

扉は左手に二つ、右手にも二つ、そして階段の両端には奥に続く通路。

「進路が多すぎて困るのだ」

「奥の通路は片方がふさがってますね。無理して行けないことはないですが」

上の通路の崩れもあつて、ホールは想像以上に荒れている。瓦礫なども戦地の跡のように散らばっている。

瓦礫だけならただの廃墟だが……なぜか壁には人為的にできた傷が無数にあつた。先ほどの肖像画についているものと同じものが四方にある。

「一体何なのでしょうねこの傷」

「獣ではないのだ。傷がぜんぶバラバラの角度なのだ」

メイの言うとおりだ。もし獣の爪ならば、平行した線がいくつかわきるはずだ。しかし黄土色の壁には、向きが同じな傷が見当たらない。

具体的に言うなら、ナイフを振り回してできたような傷が無数にある。しかしナイフにしては、自分の背では到底届かない場所にも等しくあつた。それに浅い傷もいくつもある。上の通路から床まで、さながら一つの作品のごとく壁一面に切り傷ができている。

「人でも獣でも説明がつかないのだ。進んでもうちよつと調べてみた

いのだ」

「人捜しが目的なのをお忘れなく。どこに行きます?」

「まず左に行くのだ。様子見だけしてみるのだ」

左手の方には両開きの扉と普通の扉がある。手前の両開きは大きく、開け放てば団体客がまとめて移動できるくらいだ。その表面には、他と同じく傷がある。

軋む音とともに、その大きな扉を開く。

まず反応したのは嗅覚だった。

思わず鼻を押さえるほどの腐臭が、開け放たれた扉の先に漂っていた。

ヘッドライトのかすかな光が目の中のテーブルを映し出す。奥にまで延びるほどの大きなテーブルで、その上には皿が所狭しと並んでいた。そこには、かつて料理だったものが置かれている。

炭化して黒いオブジェと化したチキン、紙くずのようになったキャベツ、謎の泡が固まっているスープ。それぞれが全て、虫が寄りつかないほどに炭化していて、白い陶器やテーブルクロスにもカビのように広がっている。

「くさいのだ」

「ひどい有様ですね。全部の料理が腐っています」

テーブルの端にはいくつかの空き皿があり、両端にはフォークやナイフが数本並んでいる。よく見るマナーの並び方だ。これらは腐食の影響をほぼ受けておらず、三本ずつきれいに並んでいる。

「見てください。フォークやナイフが使われた形跡がありません。食事前に何かあったのでしょうか」

「こんな大量な料理を用意したにもかかわらず、それに手を付けられないくらいのも出来事があったのだ?」

辺りを見てみると、入口側にカーテンがあるのを見つけた。それを開けると、食堂の全貌が見て取れる。

食堂の壁やテーブルなどには傷、血痕は全くない。ただ埃や蜘蛛の巣がある黄土色があるだけだ。床には埃の被った白黒タイルがあり、念のためテーブルの下を覗いてみたが何もなし。

……明るくなると、テーブルの惨状がより鮮明に見えてくる。虫の死骸がスープに浮いているのは見ていられず、鼻を押さえて目を背ける。

「あっちにも扉があるのだ」

同じく鼻をつまむメイが言った。

ホールから入って右手中央あたりにまた両開きの扉がある。食堂の入口とは違い、角張った簡素なものだった。

そこを開いてみるとキッチンがお目見えだ。横長に広い場所で、流し台やいくつもある調理台をヘッドライトがギリリと照らし、その上にある炭化した何かを鮮明に映し出す。

「あっちの扉はホールに続くのだ」

右手奥には小さな扉がある。左側は食堂とキッチンのスペースらしい。簡素ではあるが、メモ帳を取り出して地図を作る。

流し台、テーブル、棚などを見てみたが食べ物くらいしかなかった。食べ物は年月が経ちすぎて、虫さえ寄ってこない惨状だ。冷蔵庫は腐臭がすごかったのですぐに閉めた。

銀行にあるような鉄の扉が奥にあったが、鍵が掛かっていた。おそらくは食糧保管庫だと位置づけ、ホールに直接つながる扉からホールに戻った。

「次はどこに行くのだ？」

左手には瓦礫でふさがった通路がある。そして階段を挟んで二つの扉があった。

「向こうに行って見ましょう。とりあえず確認できる部屋は入ってみるべきです」

玄関からの光をまたぎ、まずは入口側の扉を開く。

窓からの光があり、部屋の全景は見やすかった。ホールと同じような絨毯が広がり、その中央に革張りのソファが相対し、間にテーブルがあるのがわかる。上を見上げると蜘蛛の巣の張ったシャンデリア、横を見るとひびの入ったガラス棚がある。調度品や家具からして、応接室だろうか。

結論から言えば、この部屋には何もなかった。外の明かりがあるた

め探索もしやすかった。人もいないし傷もない。

……傷のない場所とある場所の違いはなんだろう。

疑問だけが残り、収穫はないため早々に暗いホールに戻る。

次に行くのは奥の扉だ。開いてみると、そこは食堂ほどの大きさの場所だった。テーブルに置かれた壺や、壁に掛けられた絵画が、美術館のように整然と並べられている。ここにも一切傷はなく、絵画の日焼けを考慮してか窓がなかった。

「隠れられる場所はなさそうなのだ……あ！」

と、メイがとことこと近くのサイドテーブルに向かう。

「ろうそくとマッチがあるのだ」

「点きますかね」

「試してみるのだ」

燭台に手を近づけ、マッチ箱を擦る。存外簡単に火が付き、暗かった部屋に柔らかなオレンジ色の光が広がる。

改めて全貌を見ると、正方形の部屋で、食堂よりも若干小さい程度だった。やはりここにも傷や血の跡はない。争われた形跡はおろか、美術品が散らかった様子はまるでない。多少のほこりっぽさはあるものの、蜘蛛の巣が張られているところもない。ろうそくに照らされる少女の微笑みも相まって、時が止まったような静謐さがかえって不気味だった。

「何もなさそうなのだ？」

「隠れられる場所ありませんね。次に行きましょう」

視界の中には他の扉もなさそうだったため、すぐさまホールに戻る。

燭台の明かりに照らされたホールはまた別の姿をしていた。ヘッドライトより照らす範囲が違うため、傷がある壁が一気に露出する。ぼんやりとした赤い光に照らされたそれは、まさしく惨劇を連想させるような跡と化している。

……やはり傷が天井まであるのはおかしい。まるでここだけ嵐でも起こったみたいじゃないか。

「次は通路に向かうのだ」

玄関から見て右側奥の通路に向かう。こちらは上の渡り廊下の残骸がある程度で入るのはたやすかった。瓦礫を乗り越え、通路にろうそくをかざすと同時に、足が止まった。

通路にはおびただしい傷があった。扉にも、途中にある絵画にも、絨毯にも等しく細かい傷がある。小動物が引つ掻いたような浅い傷、ナイフでえぐったような傷と様々な模様が、通路の奥まで広がっている。

「な、なんなのだこれは。一体何があったのだ」

違っているのは、血痕がないことのみだ。ここまでやたらと傷がついているのはよくわからない。どうすればこうなるのか見当もつかない。

「奥に進んでみましょうか」

つばを飲み込み言った。メイも黙ってついていく。

途中にある扉を開けていくと、まず左手前が娯楽室だとわかる。ビリヤード台やダーツがあり、向こうの通路までつながる横長の部屋である。ここに傷などはなく、不審な点もないため早々に戻る。

傷だらけの廊下を歩き、続く扉はトイレだった。白い陶器は埃が被ったくらいで傷などはない。ここから奥の突き当たりまでは扉がなく進んでいく。

突き当たりに行くと、ここで傷のない廊下とある廊下にきれいに分かれた。左手は向こう側に続く道で、扉がいくつかあり、こちらには傷がない。

対して右手、ようやく見つけた階段の方には傷があった。手すりにも、階段にも生々しい傷がついている。

「傷のある場所とない場所の違いはなんなのだ……」

先ほど浮かんだ疑問を元に、メモを開く。ここまでの通路と左側に見える通路を書き、傷のある場所に斜め線を付け加えてみる。

するとどうだろう。右上の階段からこの通路を通じて、ホールまでが地続きで染まっていくのだ。

「見てください。傷のある場所に一定の法則があります」

さっそくメイに見せると、彼女はくいつとメガネをあげた。

「まるで何かを通った跡みたいなのだ」

何かを通った……改めて傷を見てみる。

体の表面に突起物がある化け物が、狭い通路をギリギリに通っている様子を想像した。いや……仮にそんな化け物がいたとしても、ホールの傷は説明がつかない。

一体何があった。何をどうしたらこれほど建物内が傷だらけになるのだ。それに、

子供はどこにいった。

ヘッドライトも、燭台の明かりもなくここを通ったのか。恐怖心もそうだが、単純に足場が悪すぎて物理的に厳しいものがある。しかも子供だ。

「とりあえず二階に行つて見るしかないのだ。音が聞こえたのは玄関側の……」

と、メイがそう言つてふるふると首を振る。

「いや、今は行つてみるのだ。何も考えずただ手がかりを探すのだ」  
そう言つて階段を上がつたため、私も後を追いかける。

しかし途中で足を止め、メモを眺めつつ通路を確認する。そうすることで、おかしい点に気づいてしまう。

ホールから音がした場所に最短で行くのならば、絶対にここを通るしかないのだ。渡り廊下は絶対に飛べる距離ではなかったし、他に二階に行ける場所はなかった。だからここを通つて二階に行き、音がした玄関側まで戻つていく……。

だとするならば、先ほどの音はおかしくないか。

子供を見失い、館に入つてからはそこまで時間をかけていないはずだ。そんな時間内で、この真つ暗な廊下を行き、二階に行き、さらに玄関側まで戻つて扉を開けるなどできるのか。どう考えても不可能だ。

だとするならば、先ほど見た子供とは別の何かがいる？ 音を発したのはまた別の存在？

メイも勘づいているのだろう。うるさい彼女もじつと黙つてしまっている。



闇の先にある謎に恐怖しつつ、一歩ずつ階段を上っていった。

## 二階の探索、子供との遭遇

階段の切り傷部分に足を取られ、慌てて燭台を持ち直す。

「大丈夫なのだ？」

「大丈夫です。足元は気をつけないといけませんね」

足場はえぐれている部分もあり、避けて通らないと足をひねりそうになる。足元を慎重に見ながら一歩ずつ進む。

上りにくい足場の中二階に着くと、二つの廊下が目の前に現れる。一階と同じく、西側に真っ直ぐ向かう廊下と左手の廊下だ。左手の方に傷が広がっていて、真っ直ぐの方には傷も何も無い。

「やっぱり何かがあった跡のように見えるのだ」

二階も同じくメモ帳に地図を描く。斜め線を引っ張って染まったスペースは、玄関側へと続いていく。一階と二階で全く一緒の構図だ。

「どうするのだ？」

「玄関側に向かってみましょう。音があった扉があるはずですよ」

傷のある道を南下していく。壁には燭台も見受けられ、壁との接合部分を残して全てえぐられている。途中傷跡の残る扉はあったが全部鍵が掛かっていた。壊してもよかったが、子供がいる可能性はまさないため意味がないと判断した。

ろうそくを天井にかざしてみる。当然ながらこちらにも傷だらけではあるが、蜘蛛の巣やほこりっぽさがないのが気になった。だいぶ時間が経っているはずなのに、なぜか年月を重ねたような跡が周りにはない。

……それに空気が重く感じる。二階に上がってからやけに息が詰まるような感覚があるのだ。微妙な空間の変化が妙に気になりながら歩を進めていく。

おそらく目的だった扉が見えてきた。暗い廊下の、右手奥にある扉。距離と位置的に、ホールで聞いた音の正体だろう場所。

傷が入った扉をゆつくりと開くと、目の前に柵が見えた。それを通じて蜘蛛の巣塗れのシャンデリアが見え、向こうも鏡あわせのように

扉があった。ここが端であり、右手に壁に沿ってずっと向こうまであり、途中で途切れて階段がある。

階段側に燭台をかざしてみる。扉が両端にあり、ぶつ切りになった通路の中央に階段が位置している。飛べるような距離ではない。

「やはりここまで短時間で来られるはずがないのだ」

「つまり、他に誰かいるのでしょうか」

「もしいるとしたら無法者の可能性が高いのだ。子供が危ないのだ」

脱走兵、バウンディハンター、ホームレス……考えられる要素はいくつかある。雨風をしのぐには十分な場所だが、生活の跡は見られない。先ほどの食堂を見れば明らかだ。

「急ぎましょう」

きびすを返して元の廊下に戻る。少し南下すると角があり、そこを曲がってみるとぎよつとして足を止めた。

瓦礫が道を塞いでいるのだ。落盤した坑道のように、向こう側が全く見えない。かろうじて窓が見えるくらいで、向こう側の光を全てふさいでしまっている。

この先が、さつき外で感じた違和感のある場所につながる……。

「どうするのだ？ 戻って調べてない場所を探してもいいのだ」

「いえ……あそこに行ってみましょう」

近くに扉がある。そこを通れば東側に行けるのではないかと考えた。あの違和感のあった角の部屋に行けるのなら、もう少し探ってみてもいい。

何かを見たわけではない。何か考えがあるわけでもない。ただ、あの違和感がどうも拭いきれなかった。

「わかったのだ。調べてみるのだ」

無法者とやらを警戒するために武器を持つ。まるで刑事のように壁に背を付け、生傷残るドアノブを慎重に回した。

すると扉は、なんの抵抗もなく開いた。ろうそくとともに部屋に入ると、ぼうつと部屋の全景が浮かび上がる。壁を埋め尽くす本棚がま

「すごい量の本なのだ」

五段ほどの棚に本が敷き詰められ、壁の他に真ん中二列にも並んでいる。広さは食堂より少し狭いくらいだろうか、ヘッドライトがようやく奥の壁に届くくらいの距離だ。一個人の家にしては充分すぎる資料室だ。

……ここも蜘蛛の巣がないな。ほこりつぽさも全然ない。

「ん？　ここは育児関連の本なのだ」

目をメイの方に戻すと、彼女はサイドテーブル近くにある小さな本棚を見ていた。見てみると、確かに育児関連の本が置いてある。ここだけは二段ほどの小さなものに、十冊ほどが隙間を作つて置いてある程度だ。

「お子さんがいたんですかね？」

「本棚が他と比べて新しい感じがするのだ。誰かが新たに作ったのだ？」

確かにこれだけは上手い素人の手作り感がある。列を成す本棚と比べて材質が安っぽいのだ。

「ここはもう少し調べてみるのだ？」

「そうですね。物陰を探しつつ、向こうの扉に向かいますよう」

ヘッドライトによって、奥に扉があるのが見えた。そこに向かうまで隙間や本棚を見回しながら進んでいく。

物陰はなかったが、この列の本棚の違和感に目が行った。今入ったスペースのほぼ全部がアーツに関する資料ばかりなのだ。『アーツ学』のⅠからⅢといった見慣れたものから、見たことない高度な専門書まで数多く取りそろえられている。

「アーツに関する本が多くありますね」

「一般家庭でアーツの本はきな臭いのだ」

つまりアーツを使える人間がいたのだろうか。でなければ一般人が触れるような本ではないだろう。また仮にアーツを使える人間がいたとしても、この量は普通ではない。天井まで届く本棚がいくつもあり、そのほぼ全部を締めている。

これではまるで、研究施設のような……。

「予備探偵、今嫌な気づきを得てしまったのだ」

「予備探偵ではないです。何ですか？」

「今まで見た傷は、アーツによつてできた傷かもしれないのだ」

傷……アーツ。

「獣でも人為的にも説明がつかない傷だったけども、アーツなら説明がつくのだ」

「この量の専門書を見ると説得力がありますね」

「ということなのだ」

メイが足を止める。

「血痕があるホールに死体がなかったのも説明がつくのだ」

「どうしてです？」

「もし獣や普通の人間の仕業なら骨が残るはずなのだ。だけどホールや廊下にある傷を見ると……アーツを鋭い刃、あるいはそれに類似するものを出せると仮定できるのだ」

「ふむ」

「だとするなら、死体は骨ごとバラバラに刻まれた。それなら多少の年月が経てば風化してしまうのだ」

突飛な発想とは全く言えない。それなら明らかに惨劇のあった場に死体がないのも説明がつく。ないのではなく、見えなくなるくらいに刻まれて風化した。

「しかしそれほど強力なアーツで事件があったのだとしたら、ニュースになっていないのが不思議ですね。犯人はまだ捕まっていないのでしょうか」

「私たちが知らないだけであるかもしれないのだ。しかしここまでの惨劇ならもつと有名になるはずなのだ」

「謎が解明されていない。あるいは犯人が捕まっていないからでしょうか」

「それはあるのだ。これほど強力なアーツを使うならもつと知れ渡っているのだ。今はどこににいるのかは謎なのだ」

「全く知らない場所に逃げたか。あるいは」

「あるいは？」

「まだこの館にいるか」

「……」

「……」

さすがに考えすぎだろうか。先ほども触れたが、人が暮らした跡がなさすぎる。いくらバラバラにしても、それら肉片が風化するには年月が必要だ。

しかしアーツなのだとしたら、どれほど強力なアーツなのだろうか。通った廊下、そしてホールの天井付近にまで及ぶ広範囲のアーツなど想像ができない。

奥の扉まで着いた。鍵が掛かっていたら無理にでも壊すしかないと思っていたが、全く鍵は掛かっていなかった。

出た先は、外の日光が入ってくる廊下だった。左はずっと奥まで続いており、右は曲がり角。その突き当たりにはボロボロになったガラス戸があり、風が入ってきてようやく重苦しい雰囲気拭かれた気がした。光と風があるとだいぶ気が楽になった。

「どっちに行くのだ？」

「行きたいところがあります。あの曲がり角の扉です」

光に照らされた扉を見やる。

「どうしてなのだ？」

「探偵の直感です」

「ほほう、直感。予備だとしてもそういうのは大事なのだ」

「だから予備じゃないです」

そう言い、ボタンと後ろ手で資料室の扉を閉める。スムーズにずれも引つかかりもなくキレイに閉まる。

……そういえば今までの扉は錆がなかったな。長年放置されているなら、蝶番が錆びていくらか引つかかかると思ったが。

変な疑問は置いておき扉に向かう。こちらも一切の抵抗なく開いた。

中がらんだりの部屋だった。角部屋らしく正面と右手に窓があるのだが、それ以外はほとんど家具がない。明るいためろうそくを消して辺りを見回す。

空の本棚に、書類が多少散らばった机、傾いた照明、奥にあるサイ

ドテーブルと、天蓋付きのベッド……その間から出た足。

「あ」

すぐさまサイドテーブルを回って見る。するとそこにはしゃがんだ少女がいた。

おかつぱ頭にフェリーオンらしく三角の耳が頭にぴんと立っており、不思議そうにこちらを見上げてみる。

「ミネアさんですか？」

「ミネア……」

視線を外に向けたが、すぐに戻しうんうんと頷く。

「私はミネア」

「よかった。私たちはロドスの者です。あなたを探しに来たんですよ」

「まったく、どうしてこんな場所まで逃げ込んだのだ」

遅れてメイがやってきた。

「ごめんなさい。びつくりしちゃって」

「ほら見てください。あなたが銃を突きつけたりするから怖がったんでしょ」

「突きつけてなんかいないのだ！ あれは野生動物とかオリズムシを警戒していたのだ！」

「ともかく、ここは廃墟なので危険です。すぐにロドスに戻りましょう」

「ロドス？」

「私たちが所属している場所で、あなたがいた難民の避難場所でもあります。周りの大人から聞いていませんでした？」

「あ、いや」

少女は立ち上がる。

「たぶん名前だけなら聞いてたと思う。でもそれどころじゃなくて」「そりゃそうなのだ。子供は逃げることで精一杯だと思うのだ」

「仕方ありませんね。じゃあ、一緒に行きましょうか」

「うん」

手を差し伸べると、少女は私の手をつかんだ。メイに燭台とマッチ

を渡し、空いた手で報告書を写したメモを見た。

私と並んだ感じ、身長はおそらく140くらいだろう。おかつぱ頭にフェリーンの耳。ここまでの外見は一致している。

でも服装は違うなと思った。報告ではワンピースと聞いていたが、実際は白いシャツにクリーム色のスカートを穿いている。これをワンピースと見間違えうかと言われると疑問に思う。

じつと見ていると、少女はこちらを見てにこりと微笑んだ。

情報提供者の気のせいかな情報の行き違いだろう。そう思って笑みを返し、廊下に戻った。



## 断たれた帰路

廊下に出て曲がり角を行くと、そこは先ほど瓦礫でふさがっていた場所だと知る。やはり資料室を通って抜けるのが早いか。

「真つ暗闇で怖くなかったのだ？」

燭台に再び火を灯し、先導するメイが聞いた。

「怖いけど、道がわからなくなっちゃって。気づいたらここにいたの」「ずいぶん迷い込んだのだ。どういうルートを通ったのだ？」

「あっち」

指さしたのは廊下の奥だ。

「向こうに回るとこつちにつながる階段があるんだ」

「へえ、あっちにもあるんですね」

とは言え資料室の前に来たからには、ここを抜けた方が早い。さっそく片手でドアノブを回す

「ん？」

開かない。なぜかさつきまで開いていた扉の鍵が掛かっている。

「どうしたのだ？」

「鍵が掛かっています」

「何を言ってるのだ。さつき通った場所なのだ」

「わかっています。でも全然開かないです」

子供の手を離し、ドアノブを思い切り引っ張ってみる。するとドアノブが根元からバキツと折れてしまった。

「何をしているのだ！ 馬鹿力すぎるのだ！」

「ご、ごめんなさい」

すかさず手でぐっと押してみる。蹴破ればいけるだろうか……だが何だ？ 感触がおかしい。ドアがぴくりとも動かないのがどうも気に掛かった。いくら鍵が掛かっているにしても、ロック部分に多少は遊びがあるからガタガタと鳴るはずなのだ。だがさつきドアノブが無事だった時も、一切聞こえなかった。鍵が掛かっている感覚とも違う。まるで壁に固定されているような感覚だった。

試しに軽く蹴ってみるとやはりおかしい。まるで向こうに空間が

ないように、重い音が響いてくる。

「ん？ 何なのだ？」

「何か変です。向こうに重い物があるかもしれません」

「何を言ってるのだ。さつきは通れたのだ」

メイが扉に近づき、コンコンとノックする。明らかに重い音が返ってくる。

「なんだこりや。本当にふさがってる感じがするのだ」

「ちよつと本気を出してみます」

足をとんとんとし、短い助走で思い切り扉を蹴りつけた。瞬間、辺りに鉄球でもぶつけたかのような音がこだまする。

……だが扉の表面にひびが入っただけで、全く壊れる様子がない。

「い、今ので突き破れないのだ？」

「やっぱり何かふさがってますよ。これでは通るのは無理です」

さつきまで通れたのに、一体何があったんだ？

疑問に思っても仕方ないため、少女が言った廊下の奥に向かっていく。

別の扉があるかと進んでみたが、都合のいい場所は全くない。右手にはいくつか扉はあるが、中央に戻る部屋がない。念のため部屋を覗いてみたが、天蓋付きのベッドもあるのでおそらくは家族が住んでいた部屋だろうか。

「廊下を歩くしかありませんね」

諦めて扉を閉める。ボタンと音をさせた時、ふと思いつく。

「そういえば、あなたはこの廊下を通ってあの部屋に行っただけですよ？」

「うん」

「ということは、ホール二階の扉は開けてない？」

「ホールの二階？ 知らないよ」

メイも私も歩みを止める。

「どうしたの？」

「い、いや何でもありません」

「きつと風か何かで閉じたのだ。それ以外にないのだ」

とは言いつつ、銃に手を掛けている。

私たちがホールにいた時は風を感じなかった。なら他に誰かがいる？ そちらの信憑性が強くなってきた。

私も警戒しながら廊下を歩いていく。左に続く扉がないか探したが、どうやら資料室以外に扉はなさそうだった。

まだ分かれ道も見えない進行方向から、思い立って後ろを見てみた。

光のある場所はもう遠くにある。私がひびを入れた扉も離れている。また目を戻し、廊下を歩いて行く。

分かれ道はまだ見えてこない。メイの燭台が照らす先はまだまだ通路が続くそうだ。だが、全く道も新たな扉も見えないのはおかしい。さつき覗いた部屋が最後で、後はただ通路が続いているのみだ。

廃墟にしてはやけにきれいな廊下だ。二階に上がってから思っていたが、ホールの朽ち具合と通路があまりにもかけ離れている。多少埃が被っているくらいで劣化はほとんどない。思い返してみれば、今まで見た部屋は最低でも蜘蛛の巣が掛かっているくらいで朽ちてはいなかった。外に繋がっていないからか？

また思い立ち後ろを振り返る。光のある場所はまた遠くになっていくが……。

「そんなに後ろを見てどうしたのだ？」

「気のせいかもしれないのですが」

「ん？」

「距離が離れすぎていて気がします」

メイはぼかんとしている。

「何を言ってるのだ？」

「あくまで体感の話です。どうも歩いた距離が、あちらよりも長く感じている」

「きつと向こうとは構造が違うのだ。もうちよつと先に行けば曲がり角があるのだ」

その時、腕をつかむ手の力が強くなった。視線を下げると、フェリーの子供は少し微笑んだ。

「もうちよつと行こうよ」

「え、ええ……」

視線を廊下の先に戻し、子供は歩みを進める。この廃墟に恐怖することなく、平然と前に進んでいる。

大人のような泰然自若とした姿。先ほどの微笑みも、まるで大人の女性が浮かべるようなものだった。ずいぶんと落ち着いているのも、年相応には見えない。

「あ！ 曲がり角なのだ」

その子供よりも子供らしいテンションでメイは先を行った。しかしドタドタと走っていったはいいものの、左に折れる道を見た途端にぴたりと足を止めた。

「ここもふさがっているのだ！」

私も曲がり角に走り見てみると、そこは袋小路だった。数メートルほどの通路があり、突き当たりに壁があるだけのスペースだ。

「期待させて行き止まりとは残念すぎるのだ」

「一体何のスペースなんでしょうね」

扉もない、花瓶や絵画も飾られていない謎のスペースだ。一体何だろうとみていると、燭台が照らす床に目を取られた。

ここも他の廊下と同じく絨毯、複雑な模様をしたカーペットがあるのだが、それが突き当たりまで延びている。私はふと思いつき、子供の手を離して端まで向かった。

「どうしたのだ？」

「見てください」

切れ端の前でしゃがみ、ぐいっと引つ張る。すると切れ端は床に張り付いたように動かず、ぴんと張る形となった。壁の下に押さえつけられているように、絨毯の端が固定されている。

「おかしいですよ。壁の下にめり込んでいるようです」

「何を言ってるのだ……これではまるで壁が下りてきたみたいなのだ」

メイの言うとおりだ。可動式の壁が上から下りなければこうはならない。しかし壁の下に隙間らしい隙間はなく、元からつながっている

るようにも見える。

まるでこの壁だけが、急にここに現れたようにも見えた。

「こつちじゃないよ」

後ろから子供に声を掛けられる。一瞬大人のものど錯覚するような声色だった。

「あなたは一体どこからあの部屋に行ったんです？」

「こつちだよ。こつち」

手招きをする少女は、そのまま後ろへ下がっていく。それに釣られ、私たちも彼女を追う。そうして元の通路に戻った時に、とたとたと左側へと走っていく。

「あ、待ってー！」

私たちも慌てて後を追った。先の見えない通路なのに、なぜか少女は迷いなく走って行く。メイが燭台を持っているため速く走れず、光ぎりぎりのところに彼女がいる状態のまま走って行く。

「どこに行くのだー！」

「こつちだよ」

彼女はそれだけ言って走って行く。

揺らめくろうそくの光が映し出すのは、後方に流れていく代わり映えしない壁と床だけだった。扉もなく、装飾品もない。ただただ廊下のみがあるだけだ。

こんな廊下のみがあるスペースなどおかしいのではないか。一人の家にしておかしい。入口から建物の全貌を思い出してみる。少なくとも正面から見た限り、ここまで奥があるとは思いつかなかった。

それに、やはり廃墟にしては絨毯や壁がこぎれいすぎる。埃もほとんどなく、ただ風が通らない場所だからという説明だけでは足りない。先ほど触った絨毯も年期を感じなかった。

廊下は続く。どこまでも続く。そろそろ息が切れそうな時に、先の少女にようやく動きがあった。まっすぐから急にカーブを作り、右にあった階段を上がっていった。

「三階！」

「どうして上に行くのだ！ 待つのだ！」

すぐさま階段を上る。踊り場をぐるりと回り、メイが上に燭台をかざした。すると少女は私たちと同じく身を翻し、上にある階段を駆け上っていった。

……また階段？

「この館は三階しかなかったはずですが」

「おかしいなだ」

また階段を上る。躊躇してしまったせいかわ女の姿が見えなくなった。それでも足音を頼りに階段を上っていく。階段を上り、似たような通路を見てまた上る。

そうしてようやく着いたのは、真っ暗な部屋だった。窓はなく、一面に絨毯が敷かれていてどこまで広がっているのかわからない。メイが燭台をかざしてみても、向こうの壁は全く見えなかった。

「おおい、どこにいるのだ……」

弱々しいメイの声は闇へと吸い込まれていく。どこからも反響はなく、限りなく向こうに続いているようにも錯覚した。

その中で音がした。さつと左へ向くと、少女が壁の方を向いて立っていた。いや、壁ではない。両開きのドアの前にいる。

まるで美術絵画を見ているように、凜として立っていた。子供離れた霧囲気を持つ少女は今一度見る。

報告書とは違う、白いシャツにクリーム色のスカートの服装。おっぱ頭にピンと立った耳。

……耳？

ここであることを思い出し、バッグからファイルを取り出す。そこには少女、ミネアのプロフィールがある。記述されたプロフィールの文章とともに、一緒にいた難民から提供された写真があった。

載っているのは間違いなく彼女だ。顔の輪郭、目鼻立ちは彼女と言って間違いない。しかしただ一つ違うところがある。

写真の少女は、耳が垂れているのだ。

今まで気づかなかった。いや、違うとは頭の片隅で思ったかも知れないが、ただ単に見間違えたのだと無意識に処理していた。

だが今までの違和感、今までの行動を見てそれが唐突に表に出ただ。よくよく見てみれば、耳の厚さも若干違う。何かの拍子で曲がったなどではなく、生まれから耳が垂れ下がっている形状なのかわかる。

つまり、ミネアとは別人。

「あなたは一体……」

言い切る前に、彼女はこちらを見た。ろうそくの明かりにぼうつと照らされた表情は、どこか達観しているような表情だった。

ふっと笑うと、彼女は扉を開けて中に入ってしまった。

## 変異する館

その両開きの扉は、おおよそ館にあるとは思えない鉄扉だった。無機質な灰色で取っ手も錆びた鉄。個人の家にあるものではなく、工場などにある頑丈なものだ。

少女の後に続き、私たちも扉を開けて中に入った。

両開きの扉の先にあったのは、ホールとは違い、剥き出しの白い床が広がる部屋だった。瓦礫がちらばっており、他の部屋にはなかったガラス片もいくつか落ちている。メイが持つ燭台が向こう側の景色を捉えると、そのガラス片の元がわかった。

壁一面に大きな窓があり、それが割れているのだ。その向こうには医療用ベッドと生命維持装置のような機械がある。管という管は全部外れており、まるで触手のごとくだらんと床に垂れ下がっている。

「病床、ですかね？」

「病床というより研究施設の一部みたいに見えるのだ」

と、メイが左の方に燭台をかざす。横に長いテーブルがあり、その上にキーボード、四台のひびの入ったモニターが壁に備え付けられている。

「二個人の館に、ロドスを彷彿とさせる装置があるなんておかしいですね」

近づいて中を見てみると、ベッドと人一人が通れそうなスペース程度しかない狭さの部屋だった。

天井にはこちら側に監視カメラのようなものが二つあった。左右から対角線を見張る形で設置されている。

「中を監視してたのだ？」

「そのようですね。誰を監視していたのか」

装置や部屋の様子は気になるが、まずは少女の方だ。この空間にはおらず、割れたガラスの向こう側にも誰もいない。

そうなる目指す場所は一つしかない。メイが私の気持ちに乗じるように。今度は右側に燭台を照らした。

そこには片開きの扉があった。今まで通った通路の扉と全く一緒



の、至つて普通の木製の扉である。入口が鉄扉だっただけに、無機質な研究棟のような場所には似つかわしくないと感じてしまう。

他に出口も窓もないなら、ここしかないだろう。

暗がりの中、扉に近づきドアノブに手を掛ける。中を窺うようそつと開けると、隙間から漏れ出た光のまばゆさに、思わず目を閉じた。

奥に天蓋付きのベッドがある、個人の部屋だった。三方の壁には窓があり、白いカーテンを通じて陽光が惜しみなく部屋に降り注いでいる。もはや燭台もいらぬほどに光が満ちていた。

光とともに、音の存在にも気づいた。オルゴールが鳴っている。どこかで聞いたようなゆつたりとした童謡が、きれいな音で奏でられている。

こんな廃墟でオルゴールなど鳴るものだろうか。辺りを見回してみみる。

床には赤い絨毯が広がっていて、中央に何やら散らばっているものがある。それがパズルだと気づいたのはすぐだった。左半分が完成しているが、もう半分のピースが右側に散らばっている。

左手には小さな本棚があり、すぐそばの机には積み木がある。オルゴールはそちらから聞こえてくる。

近づいてみると、机の裏から音がする。そこを覗いてみると、オルゴールが横倒しで倒れていた。簡素なネジ式のもので、それが錆びもせず回っている。それがひどく不気味だった。一応机と本棚の隙間などを探しても、彼女はいなかった。

ふと本棚を見てみると、ラインナップが絵本だけなのがわかる。大きい本から小さく分厚い本まで様々だが、全部が絵本であると思われる。

……子供部屋なのか？

「予備探偵」

「なんですか？」

「この部屋、おかしいのだ」

疑問に思い振り返ると、メイは向こう側の壁を見ていた。入口から見て右手の、窓がいっぱいある……ん？

そうだ。この部屋は入口を除く三方に窓がある。それはおかしいはずだ。

右手にはホールがあるはずなのに。

メイが窓に近づき、カーテンを開ける。すると曇りガラスなのかというくらい、窓にはもやがかかって向こう側の景色が見えない。

「窓も開かないのだ。どういうことなのだ？ この館に入ってから超常現象が起きまくりなのだ」

「おかしいことだらけです。なぜか開かなくなった扉、不自然に壁がある廊下。三階しかないはずの館をひたすらに上り、不釣り合いな両開きの鉄扉にたどり着いた。そしてこの部屋」

「夢の中にいるみたいなのだ……」

まさしく、そう形容するのが一番いい。だが夢や幻にしては実感があまりすぎる。だとするならば、この部屋まで逃げた彼女は……。

「ここは私の部屋だよ」

唐突に声が聞こえ、天蓋付きのベッドの方を見る。するとサイドデッキの陰から、彼女がすつと出てくる。どこか悲しげな表情だった。

「どういう意味です？」

ああ、よかった。無事だった。なんて言葉は出なかった。少女の異質さを垣間見て、疑問がまず口に出た。

「そのままの意味だよ。昔住んでた部屋」

「おかしいのだ。君はリターニアからの難民のはずで、ここはずっと前から廃墟になつてはるはずなのだ。時期が合わないのだ」

「ああ、そうだった。ミネアのふりをしているんだった」

「ふり？」

「今は気にしないでもいいよ。でも、二人ともここまで迷い込むとは思わなかったな。ただ場所を案内するつもりが、こんなところまで迷わせちゃった。私も出口を目指してたけど、階段を下りるとさらに深淵に行ってしまうそうだったから上に上がってしまった。結果的には成功だった」

「何の話です？」

「説明したいのはやまやまだけど、今はそんな悠長な話をしている場合じゃない」

頭を振った後、こちらをまっすぐ見た。

「二人とも、外まで逃げて。私の後についてきて」

「え？」

疑問を呈する暇もなく、彼女は私たちの脇をするりと抜けて入口へと向かった。扉を開けて暗がりへ行く彼女の後を追い、閉じかけた扉を押さえ開いた。

「え？」

思わず目を疑った。先ほどまでぼろぼろだった部屋が、見違えるようにきれいになったのだ。薄い蛍光灯が点けられて、床はワックスでも掛けられたようにその光を反射している。ベッドのある部屋のガラスも割れておらず、まるでこの部屋だけ時が遡ったみたいだ。

そんな場所に薄く黒いもやが動いている。粘度で不格好に作られたような人型で、もぞもぞと動いているのが二つ。ガラスの向こうを見ている形で立っている。

(実験は……)

(アーツ……後天的な……)

ささやく声が聞こえてくる。スピーカーカーにノイズが入っているようにブツブツに途切れながら聞こえてくる。

「これは一体なんなのだ」

「わかりません。もう何がなんだか」

頭を押さえる。今まさに恐ろしい体験をしているのだが、どうも夢心地にいるような感覚だ。今の不可思議な現象を、遠目からぼうつと見ているような不思議な感覚だ。だからあまり恐怖感を感じなかった。テレビの映像を、寝ぼけ眼で見ているようで……。

「こつちだよ」

声が聞こえた。彼女は両開きの扉を開き、向こう側へと消えていく。その後を追うと、先ほどのホールだ。あのただっ広い用途のわからないホール。

再度足を踏み入れてはつとした。

ホールにはいくつもの扉があった。壁ではなく、空間に独立した扉がいくつもあるのである。

「な、なんなのだこれは」

こちらに向かい合う扉、斜めになった扉などさまさまなものが部屋中に立てかけられている。燭台が照らすスペースだけでも、両手で数えるには足りないほどにある。

「こつち、こつち」

少女は左斜め前方の扉を開けて中に入った。不思議なことに向こう側にはすり抜けず、どこかへと消えてしまった。

「あぎや！ 消えてしまったのだ」

もはや声すら出ないくらいに戸惑った。若干のめまいがする中、急いで彼女がぐぐった扉を抜ける。

目の前に縦に並んだ本棚が目に入る。資料室だと気づいたのはすぐだった。先ほど通って、なぜかふさがった部屋だ。慌てて後ろを見ると壁はあったが、扉はホールにつながったままだった。

「こつちには壁はあるのにこつちにはないのだ！ どういう構造なのだ！」

扉を往復しながら言う。

メイのうるさい声の他に、もう一つ声があるのに気づく。前方の方で、何やらぶつぶつと小声でつぶやくような声だった。

よく見てみると、真ん中の通路の奥に黒いもやがあるのに気づく。さつきガラスを覗いていた人型のようなものが、本棚の前に佇んでいる。

「メイ。あれ」

「わ、わかってるのだ」

二人で連れ立って向かう。

(まさか……こんな副産物が)

近づぐごとに声ははつきりと聞こえる。

(福音とも捉えられる……アーツが……)

だがブツブツと途切れるのは先ほどと同じだ。野太い男の声が、小さいながらも重圧さを感じる響きで空間に反響している。

(ああ……娘よ)

意を決して黒いもやに触れようとする、崩れるように霧散した。

「消えたのだ」

「娘……？」

娘と今の黒いもやは言った。一体誰で、何の話をしているのか。

「こつちだよ」

呆然としていたところ、少女が本棚の陰から顔を覗かせて向こうの扉へと走って行く。私たちもすぐに追いかけた。

扉を開けると、次の景色は廊下だった。横に広がっていて、そこにはいくつもの扉があり、両端は向こう側に曲がる構造だった。奥までまっすぐ見える。なぜなら、照明が薄く点いているからだ。

少女は右手側に走っていた。すかさず追おうとしたが、廊下にはいくつもの黒いもやがあった。今までは一人か二人だったが、今回は廊下を移動したり固まったりしてる人型が何体もいる。

一瞬気圧されたが、その中を走って行く。

(地下の研究所で……)

今度は若い女性の声だった。

(かわいそうに……鉱石病なんて)

(病気ですら……旦那様が無理をして……)

使用人ではないか、と直感した。

(アーツ……実験……)

なぜ使用人が黒いもやになっているのかわからない。だが今は現実的な言葉を並び立てるよりも、目の前にある不可思議な現象をそのまま捉えるしかない。黒いもやがあつて、それが話をしている。

それに加え、今走っている廊下は明かりが点いており、一切の傷も埃もなくきれいであつた。まるで昔に戻ったように……。

いくつもの黒いもやを通り過ぎ、曲がり角を曲がる。角を曲がって一つ目の扉を、少女は今まさに開けて中に入った。

照明のあつた廊下とは違い、中は真っ暗だった。燭台の明かりは、鉄製の壁と床を映し出した。

靴の音が軽く反響する。錆びた金属は靴底でざらつきを感じるほ

どであり、ずいぶんと廃れている印象だった。ここは一体どんな部屋だろう。普通の部屋のようには見えないが……。

そう思い歩を進めると、片開きの鉄扉にたどり着いた。ぼんやりと照らしていた時は、錆びたものだと思っていた。

しかし近づき、火の明かりが全体を照らすと全身の血の気が凍った。

おびただしい傷があり、黒ずんだ血痕が意匠のようにあちこちに飛び散っている。今まで見た傷とは違う。大きくはなく、小さな平行する線がいくつもある。それが獣でもなく、アーツの傷でもなく、人がひっかいた傷だと気づいたのはすぐだった。

「ここにあるの。私の記録が」

はつとして右を見ると、そこには少女がいた。

「悪いことをした時、止めようのない暴走の時、ここに閉じ込められた」

「記録とは？」

「アーツを抑える、あるいはコントロールする術をまとめたノートがここにあるの」

アーツ……ではこの子は。

「今は記憶の中だけど、本当の場所はホールの奥にある」

「本当の場所？」

「ここは記憶の世界。私の記憶の中」

「君は一体誰なのだ？」

彼女はふるふると首を振る。

「私の正体は気にしなくていい。それより現実のここにあるノートを見つけて欲しい」

「なぜそうしてほしいんです？」

「あなたがロドスにいるから」

ロドスの名前を知っている？

「だから見つけて。あの子……ミネアのために」

彼女の真摯な顔を見ると、どこからかふつと、風が吹いた。それに乗じて燭台の火が消え、辺りは闇と化した。

「わわ！ 真っ暗なのだ！」

突然感覚がシャットダウンされて戸惑ったが、向こうに光が見えた。それはちょうど隙間から漏れ出る光で、枠としてはちょうど扉のような形になっている。そこに一歩一歩近づき、手探りでドアノブを探す。

あつた。それを勢いよく回して扉を開けた。

見覚えのある場所だった。大きな部屋の中央に大きなテーブル。照明が点けられ、テーブルには色とりどりの食事が並んでいる。壁や天井は一切のほころびもなく、床は真っ赤な絨毯が敷かれている。そんな空間を、数体の黒いもやたちが移動している。

間違いない。最初に探索した食堂だ。黒ずんでいない食事といい似ても似つかないが、まさしくあの場所だと確信できた。

「もうわけがわからないのだ……」

もはや疑問を挟む余地なく、次から次へと不可思議な現象が起る。だからなのか、冷静に周りの状況を観察できるようになった。

(主人が戻ってこない……)

(何か物音が……二階で一体何が)

人型をした黒いもやたちが何やら慌てている。頭を抱えたり、あちこちに歩き回る様はシルエットのようでもあつた。もう料理は用意されているのに、着席しているのが誰もいない。

(きやあ！)

叫び声が聞こえた。今までと違って明瞭に聞こえたそれは、両開きの扉の向こう、つまりは一階ホール側から聞こえてきた。

(なんだなんだ！)

(何か物音が)

黒いもやは扉の方にすり抜けて消えていく。

私とメイは目を合わせ、すぐに扉の方へと向かった。開け放つと、そこは一階のホールだった。壁と床にあれほどあつた傷はなく、シャンデリアも優雅に光った空間。二階通路も崩れておらず、廃墟になる前の館の姿が平然とそこにはあつた。

黒いもやは、奥の通路側に集まっている。

唐突に風を頬に感じた。辺りを見ても窓はなく、玄関も開いていない。それなのに平原にいるような風が、この空間に吹いているのだ。どこからだ？ 向きを考えて見てみると、どうやら奥の通路からのようだった。そこを見ると、近くにある絵画はがたと揺れ、床にある絨毯はたるんだ状態でなびいている。

(ぎゃあ！)

(うわああー！)

またもや明瞭な悲鳴が響き渡る。黒いもやは散り散りになり、辺りを逃げ惑った。

音がする。奥の通路からごうごうと、濁流のような激しい音が聞こえてくる。そして何かを引き裂くような金切り音も聞こえてくる。それに乗じて風も強くなる。頬をなでるものから、髪をなびかせるほどに強くなる。

来る。何かが来る。

奥の通路から木片が飛んできた。ホールの花瓶に当たり、床に砕け散った。がたがたと揺れていた絵画の表面にナイフで切ったような傷ができ、がこんと壁から外れた。

風は立っているのがきつくなるほどに強くなる。逃げたくても逃げられない。なぜか足が動かず、ただ腕で顔を隠す防御態勢しか取れない。

目を凝らしよく見ると、奥の通路から何かがやってきた。

髪がボサボサで、布のボロ服を着ている少女がやってきた。裾や髪が風で揺れており、物言わぬ様は全ての元凶のようにも見えた。彼女の周りの風が一段と強く、絨毯すら舞いあげ切り刻んでいく。

少女が歩くごとに、辺りに傷ができる。壁を裂き、床を裂き、轟音とともに辺りを破壊していく。

そうして彼女と目が合った。その瞳は吸い込まれそうな緑色をしていた。ごうごうとうなる風を前に、なぜか気持ちはぼんやりとしていく。

目に魅入られ誘われるように、意識はふっと閉じていった。



……

……おい。

「おいー!」

はっと目が覚める。

目の前には青空があり、手や背中に草の感触を感じた。そしてこちらを覗き込むのは、同じ班にいたズイマーだった。

「大丈夫か。どうしてここに寝っ転がっているんだ」

「え?」

はっと腰を上げる。

辺りを見てみると、小川が流れる草原にいた。辺りには木もなく、青空からの陽光がきらきらと水面を光らせている。遠目には、最初に探した洞窟があった。

「ここは? どうして外に」

「ううん……」

傍らにいたメイも目を開けた。

「な! どうして外に出ているのだ!」

彼女も当然の反応をする。おかしい。私たちは今まで館にいたのに。

「二人とも何をしてたんだよ。こっちが必死こいて子供を探していたのに」

「いえ、私たちも子供を追いかけました」

「え? どこに?」

「あつちです」

洞窟方面を指さし、そのまま左にずらしていく。

「あの奥に館があつて、そこに子供が逃げ込んだんで追いかけました」

「おいおいどういうことだよ。子供ならもう見つけたぞ」

「は?」

メイとそろって声が出てしまった。

「あたしらが探してた方面の山小屋にいたんだ。そっちになんか行つ

てないぞ」

「どういうことだ？ やはり、あの少女はミネアではなかったのか。だとしたら……。」

「いやいやおかしいのだ。確かに子供を見たのだ」

「また別の子供でもいるのか？ はぐれたのはミネアだけのはずだが」

「そのミネアを追いかけていたのだ。だから館にまで行って、建物の部屋という部屋を探していたのだ——」

「さつきから聞いてりやおおかしなことを」

ズイマーが頭を掻く。

「お前らが言ってる館って森の奥のやつか？」

「はい。そうですね」

「近くに館があるのは、同じ班のやつから聞いている。しかし十数年前に廃墟になって誰も近寄らなくなったそうだ」

「それはわかってるのだ。だから隠れられそうな部屋を探し回ったのだ」

「部屋？」

ズイマーが片眉を上げた。

「あの館は一階ホールを除いて岩盤に沈んでいると聞いた。それ以外の部屋はもうないはずだぞ」

「……へ？」

## 夢の少女の正体

「一体何だったのだ。わけがわからないのだ」

メイが机の上に頬を乗せた。

「ミステリーにも超常現象とやらはよく出てくるけど、ここまで露骨なのは知らないのだ」

「そうですね。事実は小説より奇なり、と言ったところでしようか」

あの後は任務も終わったので無事にロドスに帰還した。意識を失っていたからか、ズイマーに医療部に行くよう強く言われて渋々検査を受けてきた。館の話を胸に秘めつつ、今はようやく解放されて部屋に戻ったのである。

「館の話なんかしたら医療部にCTスキャンでもされそうです」

「仕方ないのだ。ところで事件の資料の方は手に入れられたのだ？」

「はい。簡単なものではありませんが」

バッグから薄いファイルを取り出す。医療部から帰る際、あの館の事件について知っている人物に話を聞き、資料を手に入れたのだ。

「適当な記事を印刷してきました」

「どれどれ……」

記事によると、館はリターニアから逃げた没落貴族のものらしく、国の外れに家を建てひっそりと暮らしていた。しかしある日、館がある方面に機材などが多く運ばれているのを近くの住人が見たようだ。どうも医療機器や科学機器といった資材が運ばれているようで、何やら研究しているのではと噂されていたらしい。街にいるアーツ研究者も館に向かっているとの話もあった。

そんなある日、研究者の家族がいつまでも夫が帰ってこないと警察に連絡をした。彼らが件の館に向かったところ、落盤事故で崩れた館があった。

何が起きたかは不明だったが、残されたホールに、鋭利な刃物で切り裂かれたような死体が数体あったらしい。

「骨がなかったのは回収されたからですね」

「うむ。ホール自体は本物だったはずなのだ。どこまで残ってるかは

知らないけど、食堂に入ってからには確実に夢の中なのだ」

夢の中、という言い方が妙にしっくり来た。

「あるはずもない場所に行けたのも夢の中だからですか。ホールや食堂、一階部分は悲惨な状況でした。あれは事件が起こった後の景色なのでしょいか」

「傷があるならそれで間違いないのだ」

「途中、正確には二階を歩いているあたりから館がきれいになっていききました。まるで、どんどん過去に遡っていくような……」

彼女は記憶の世界と言っていた。進むごとに記憶は深化していき、より彼女の心に迫る過去の話に向かっていったのか。そして最後には、惨劇の直前にまで立ち会ったと。

「とりあえずこの話は際限ないから置いておくのだ。館にいたのはミネアじゃないと本人が言っていたのが気になるのだ。ふりをしていたとか何とか」

「はい。耳の形状が違うんですよ。あつたのは耳がぴんと立っていて、本物のミネアは垂れている」

「つまりあれは偽物。彼女のふりをしていたのは、記録を見つけてもらいたかったから」

「一体彼女は何者なのでしょう」

うーんと、二人でうなる。

「今はミネアは居住区の方にいるそうですよ。行ってみますか？」

「いや、今は会わないのだ」

メイが勢いよく立ち上がる。

「記録を探してみるのだ」

「本気ですか」

「リターニアにはしばらく滞在するみたいだし、調査に出向くくらいの時間はあるはずなのだ」

「どこに独房があるかもわからないですよ」

「彼女はホールの奥にあると言っていたのだ。一階の北側とか奥とか言わないあたり、残っている場所から近いのではないのだ？」

なるほど。これは鋭い。

「可能な限りやってみるのだ。本当は人をもっと集めたいけど、非現実すぎて説得するのは無理なのだ」

「なら二人で行きましようか」

というわけで外出許可をもらい、日が明けてからまたあの森へと向かった。洞窟を通り過ぎ、小川を超えていくと前と同じように光があふれる草原に出た。

館は聞いた話の通り半壊していた。後ろにある山から落ちてきたであろう土砂や岩が館の左右をすりつぶしている。

「覚悟はしていましたが、本当に崩れているんですね」

「ここから夢は始まっていたのだ」

ホールに入ってみる。持参した懐中電灯を照らして見てみると、ホール自体はそれほど変わった様子はなかった。天井にある蜘蛛の巣だらけのシャンデリアも、変な部分で途切れた二階の通路も同じ。だが奥に続く通路は岩でふさがっていて、食堂や資料室あたりの扉はひしゃげてしまっている。

さて、問題の独房はどこだろう。

「ホールの奥と言っていたから、階段の裏とかを探してみるのだ」

メイについていく。階段の裏はよりいっそう薄暗くて、足元を照らして瓦礫を避けながら扉を探してみる。

「入口らしき場所はないのだ。なら壁とかはどうなのだ？」

メイが壁を、位置的には遊戯室に面する辺りをこんこんと叩き始める。

「ん？」

ちようど階段の中央に位置する場所を叩くと、そこから軽い音が返ってきた。

「ここが怪しいのだ」

私も軽く叩いてみると、向こうに空間があるのがわかる。隠し扉だろうか。

「仕掛けでもあるのかもしれないから探すのだ」

「いえ、面倒ですので」

後ろへ下がり、助走をつけて壁を思い切り蹴った。

壁はもろくも崩れ去り、ハリボテのように向こう側へと倒れる。下りる階段に沿って、ずりずりと欠片が落ちていく。

「絶対簡単な仕掛けがあったと思うのだ……」

「開いたからいいじゃないですか。さあ行きましょう」

地下へと続く階段は、人一人分しか通れない道だった。材質は全て鉄でできており、下りる毎にカンカンと軽い音が辺りに響き渡る。錆びてざらざらになった壁に手を伝い、慎重に下りていく。

位置的に言えば遊戯室の真下くらいだろうか、そこでようやく底まで着いた。二人がようやく立てるスペースの真ん前に、鉄製の扉が現れた。また蹴破るかとも思ったが、ドアノブを回すと簡単に開いた。完全に開けると、中が立方体の小さな部屋だとわかる。例のごとく鉄製で辺りは錆だらけ……いや、この黒ずんだものは錆ではないかもしれない。

傷があるのも気になった。夢の中で見た大きな傷ではなく、引つ掻いたような傷。それが床、壁の至る所にある。それ以外には、家具も寝具も一切ない。

「さながら地下牢ですね……ん？」

奥の隅に何かを発見した。近づいて光を当ててみると、ぼろぼろになったノートだとわかる。

「これが記録でしょうか」

「本当にあつたことに驚いているのだ」

「ですね……」

闇の中、得体の知れないノートに目を落とす。名前は記されていない。

「さて、これをミネアに渡さなければいけません。先に内容を読んでしまいましたでしょうか」

メイも頷き、私がノートを持つ形となった。名前が記されていないから、誰なのかはわからない。

そういえば彼女は、ミネアをあの子と言っていたな。知り合いだったのかどうか、彼女とミネアの関係性は一体なんだろう。

……そうして気づいた。ふとした瞬間に思った疑問から、あること

をひらめいた。

いや、どうだ。推理ではなくこじつけではあるし、確証もない。だがあの大人びた感じは説明がつく。現実的にはあり得ない推理だとしても、あの夢の中のみ成立してしまう。

どうなのだろう。そんなことが実際にあるのだろうか。答えを確認するため、ぼろぼろのページをめくった。



ロドスに戻った私たちは、ミネアがいるという医療部に向かった。難民たちは等しく日をまたいでの検査を受けており、彼女もその対象になっているのだ。

食堂を抜け、昇降機を使って医療部へと向かう。廊下には検査を受け終わった難民だろう人だかりがあった。

「すみません」

近くにいた男に少女について尋ねてみると、すぐに情報を得た。どうやら今まさに検査を終えてあてがわれた病室に入っているらしい。

「病室？ 隔離されているのだ？」

「どうなんでしようね。行ってみましょう」

話を聞いた場所へと向かう。人だかりが遠ざかったところで廊下は突き当たり、そのすぐ左側に件の部屋があった。

自動ドアが開くと、中には一つの病床が見える。その真ん前に医療オペレーターがいて、ベッドにはあの少女がいた。

フェリーンの子、耳が垂れている子がぐっすりと眠っている様子だった。

「あなた方は……」

おかつぱのオペレーターが振り返る。

「彼女に用があるんです」

「今は眠っていますので。話でしたら私が聞きましょうか」

少し迷いつつ、話を切り出す。

「彼女は重い病気ですか？」

「軽度ではありませんが鉍石病に掛かっています」

「だから一人だけ離しているのだ？」

「そうですね。鉍石病なので、仕方なく」

と、彼女は目をそらす。

「彼女はアーツを使える？」

「え？」

「アーツを使えるからこのように隔離している？」

「……アーツを使えるかどうかはまだ検査をしていないのでわかりませんが、不思議な力があるとか他の人から聞いたようで、念のためです。他の人の話だと、何でもこの子の周りだけ強い風が吹く時があるとか」

やはりそうか。

「どうして知ってるんです？ 今の話は誰にも話をしてないはずですが」

「難民たちが言ってるのを聞きましたね。で、彼女に会おうとしたのは渡したいものがあつたからで」

バッグからノートを取り出す。

「このノートを預かってくれませんか？」

「これは？」

どう言おうかと思ったが、私は「ここではつきりと言った。」

「彼女の母親の書記です」

「母親？」

「ええ、ミネアさんの母親のものです」

そう。私たちを案内していたのは彼女の母親だ。顔立ちが似ているのはそれで説明がつくし、耳が若干違うのは父親の遺伝があるからだろう。色合い自体はほぼ同じだ。

「おかしいですね。彼女の母親はすでに亡くなっていると聞いていたのですが」

「あくまで人づてに聞いただけです。ノートもその人から預かっただけ」

「日記か何かですか？」



「いえ、自分のアーツについての研究が主ですね。彼女の母親もアーツを使えたらいいので、この子の能力の参考になるかもしれません」  
「アーツの研究？」

このあたりは下手な言い訳をするより直球がいいだろう。

「……そうですか。では、私が預かっておきます」

若干怪訝そうな目をした彼女にそれを渡し、私たちは部屋を後にした。

「これでアーツの研究を勝手にやってくれてくれるでしょう」

「想った以上に事細かに書いていたから間違いないのだ」

「データだけを抜き取ってくれるのを期待しましょう。正直、あまり子供に見せる内容でもなかったのです」

メイも思い出したのか、口を噤んだ。

地下の暗闇でノートを見た時はぞつとした。

まず始めに、父親に対する呪詛がいくつも書いてあった。それと同じにぐるぐるとボールペンで塗りつぶした痕も付け加えられ、死という文字がいくつも見え隠れしていた。

読み進めるとようやく日記とも呼べる箇所も出てくる。病に掛かって手に入れた得体の知れない力を、父親はギフトと呼んで研究をしていた。目に余る非人道的な実験を行っていたらしい。ノートの最後まで恨み辛みが書かれており、反対に己のアーツを熟知しようという気概も見て取れた。それは学びや殊勝なものではなく、復讐心から来るだったのだろう。

だからこそ、館の惨劇を引き起こせた。

凄惨さを感じさせる激情的な文章と、かたや自分のアーツについての理性的な分析がないまぜになったノート。子供に見せるには刺激が強すぎる。

「あの館が彼女の母親の生家だというのは確定しているのだ？」

「調べれば繋がりが出てくるでしょうね」

「調べるのだ？」

「いえ」

足を止める。

「もし調べたら余計な過去が出てしまいます。彼女の母親は亡くなっているのだし、今更掘り返すつもりもありません」

「そうなのだ。別にあそこが何だったのかわかんなくて気にする必要はないのだ。私たちはただ夢を見ていて、それを見たらまたまた彼女の役に立ちそうなノートを見つけたってだけなのだ」

えっへんと言わんばかりに彼女は胸を張る。

彼女の言うとおり、真実は胸に秘めておけばいい。

彼女の母親が幽霊となって現れ、自分の娘の身を案じて私たちを館へと導き、アーツのノートを娘に送り出す。

……なんて真実だ。まるでファンタジー小説みたいな中身じゃないか。

「どつと疲れましたね。こうなったら何か論理的な、現実的な推理小説でも読みふけていたいですね」

「それなら気になってる本があるのだ。ジョン・デイクスン・カーの『火刑法廷』という推理小説があつて——」

「よりにもよつてその作品ですか」

はあ、とため息を吐いた。

「もう非科学的な話はこりこりです……」